

靴の歴史散歩 ⑦①

皮革産業資料館 常任委員 稲川 實

(前号に続く『靴商工新聞』の記事)

当時軍靴が主であった伊勢勝工場が出品した足数がもっとも多く、目録によると次のように多種多様の靴が出品された。

本乗馬靴、騎馬長靴、家(ウワ)靴、女用靴、女用ゴム靴、礼服ゴム靴、遊獵編上靴、ボタン付女靴、半長靴、測量靴、軍靴、リンネル靴、美碇どめ半長靴。

以上の各種靴は「製靴注文帳」にも散見されるが、その価格で一番高いのが騎馬靴十三円、礼装用の深ゴム靴五円、ラシャメン皮(高級外国製の意味か)女ゴム靴四円五十銭などとなっている。客層の中には外国大使館、政府の一流高官の名前が次のように記されている。

編上半靴 二円五十銭 英国大使館

ウワ靴 一円十二銭五厘 大倉組

二等長靴 七円十二銭 警視庁

ゴム靴 五円五十銭 伊達宗敦

二重靴 七円五十銭 露西亞学校

兎半靴 一円五十銭 仏蘭西公使館

ウワ靴 一円 岩倉公・安姫

兎礼服ゴム靴 二円五十銭 佐藤

ゴム靴 四円五十銭 品川彌二郎

ゴム入り半靴 三円五十銭 徳川公

毛ジュス女トンビ 二円五十銭 ミチス

ハギゴム靴 四円五十銭 伊太利公使館

園田東靴副会長の話

「ゴム靴というと現在のものを想像するが、これは紳士礼装用

で、横にゴムを入れた深ゴムのこと。いずれも昔なつかしい呼称で、こうした貴重な文献は、ぜひ永く保存されたいものである」と、園田氏の談話をもってこの記事を終んでいる。

これを書くに当って、貴重な「注文帳」を再度閲覽させていただいた。その結果、前回には気付かなかった顧客の中から、「フォンタネージ」の名を見付けることができた。フォンタネージとは、東京に新設された工部大学の政府招聘の美術講師で、1876年(明治9年)から78年(明治11年)まで教壇に立ち、日本の洋画の発達に多大な貢献をした人物である。あの浅井忠も、門下生の一人であった。

各国の大使、公使、そして着任早々のフォンタネージまでが注文しているところをみると、この時点で日本の靴もある程度の水準に達していたとみることができるのではないだろうか。

いずれにしても、歴史上の人物に出会えたような、そんな身近さを感じる注文帳は、まことに貴重で、うれしい存在である。



明治17年当時の櫻組出張店の全景(現・銀座3丁目 ルイ・ヴィトンの場所)